

野鳥シート解説

バードウォッチング 身近な野鳥

常務理事 平田 寛重

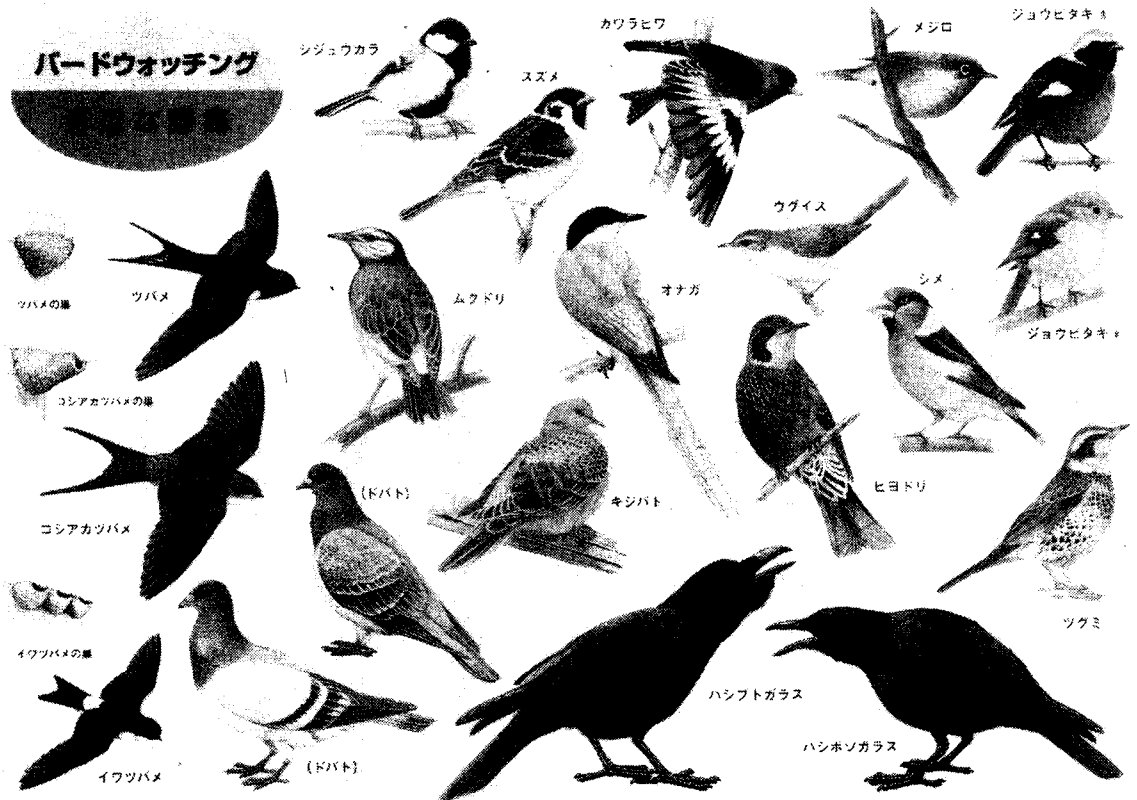
2年前に『水辺で楽しむバードウォッチング(秋冬編)』の野鳥シートを作成したところ、好評をいただきました。そして、春夏編はないのか、山の鳥編はないのかなどの声も数多く寄せられました。そこで、当会が1993年12月に作成した『身近な野鳥』(12種の野鳥シート)を元にして、市街地での観察機会の多い野鳥34種を選び、原画の作成を再び松原巖樹氏にお願いして出来上がったのが今回の野鳥シートです。

選定した34種については全国的な分布資料を元にして選びましたので、西日本で観察機会の多いミヤマホオジロ、渡り途中で見られるオオルリやキビタキなども採用しました。また、ドバトはかごぬけの鳥で野鳥ではありませんが、どこでも見られるので()に入れておきました。

表面は市街地の鳥で、左が夏鳥、中央が留鳥、右が冬鳥、上が小さく、下にいくほど大きな鳥になるように配置しました。裏面は農耕地・雑木林・多くの木々が茂る公園などで見られる鳥で、左が夏鳥、中央が留鳥、右が冬鳥、左下が水辺・農耕地というような感じに配置しました。

絵柄については、見た目では雌雄が異なる種は卵を、ジョウビタキとキジは♂♀を、ドバトは二つのタイプを用意しました。夏冬で羽色の異なる種のヒバリとセッカは繁殖羽を、シメ、カシラダカは冬羽というように、見られる可能性の高い絵柄にしておきました。

大きさについては、同縮尺で表すことが難しく、多少不自然な部分もありますが、比較の目安がおよそわかるように調整しました。



ツバメ

全長17cm 背は濃紺で腹側は白い。喉と額が赤い。尾羽に白い細い帯が出る。

日本には、北海道の一部を除いて夏鳥として渡来する。3月頃から飛来し、1回から3回くらいの子育てをして10月頃には南へ渡る。夏には、巣立った若鳥たちが河原のアシ原などで集団でねぐらをとる。最近では、市街地周辺の水田が減り巣材に適した良質な土が採れなくなり、巣が使用途中で落ちてしまう事がよくある。落ちた雛をカップ麺などの容器に入れて元の場所またはその近くにガムテープなどで固定しておくとし育てを続ける。空中を飛びながら口を開け浮遊している虫を食べる。雛や幼鳥の餌には、羽アリやトンボ、カワゲラ、ハエ、アブなどが与えられる。

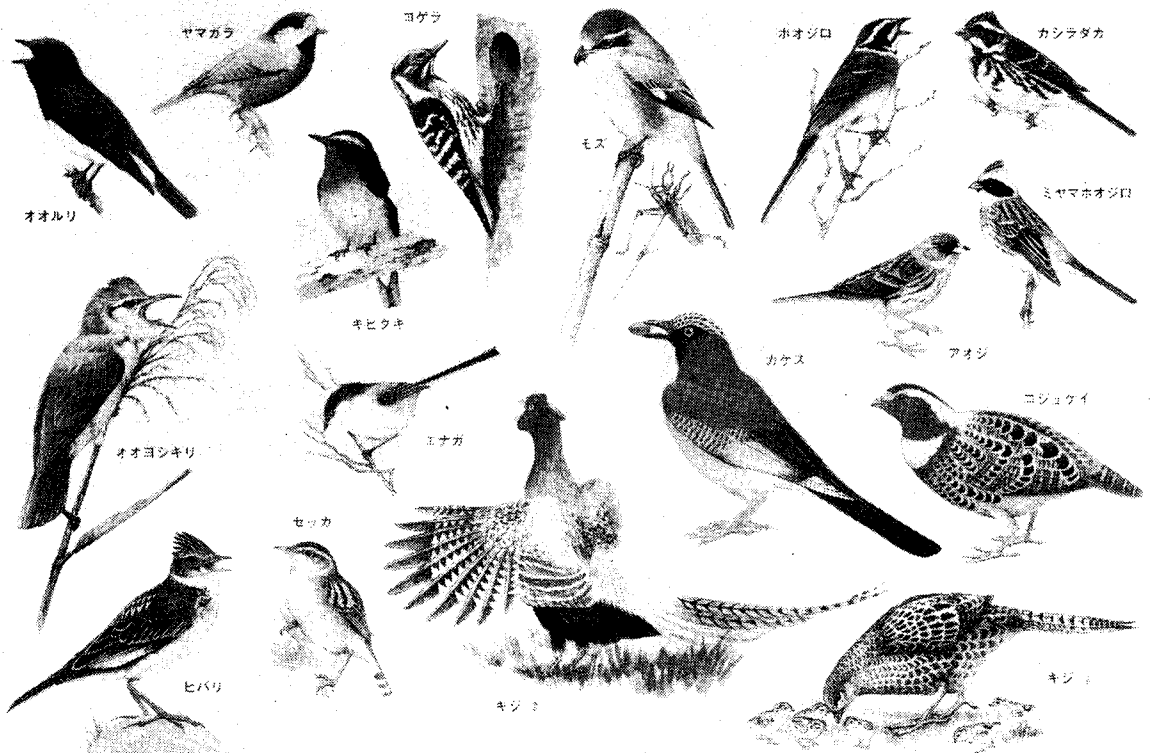
ツバメは、街中に巣を作り身近な場所で繁殖活動を見せてくれるので教材として利用しやすい。あまり刺激しないようにして観察活動を行うとよい。

コシアカツバメ

全長18.5cm 背は藍色光沢のある黒色で腰は赤褐色。胸から腹にかけて淡褐色で縦斑がある。ツバメより燕尾は長く体も若干大きい。夏鳥として全国に渡来し、繁殖する。関西以西では観察機会が多い。九州では越冬している例もある。最近では、高層住宅の踊り場などにとっくり型の巣を作る。造巢中からスズメが様子を伺いながら完成した頃を見計らって巣を乗っ取ることがある。飛びながら空中に浮遊する昆虫などを食べる。鳴き声は、ジュリジュリと低めの声である。

イワツバメ

全長14.5cm 背は光沢のある黒色、腹と腰は白色で尾が短い。ツバメよりやや小さい。夏鳥として全国に渡来する。山地や海岸の断崖、ビルや橋桁などの建造物に集団で丸形の巣を並べて造る。関東以西では越冬する個体もある。巣をスズメに横取りされることが多い。飛びながら空中を飛び交う昆虫などを捕らえて食べる。ジュツジュツと濁った声で鳴く。イワツバメは雛の時から足にまで白い毛が生えている。



シジュウカラ

全長14.5cm スズメとほぼ同じくらいの大きさで、背は緑がかった青灰色、頬が白く、喉に黒いネクタイ模様がある。ネクタイの幅はオスが幅広くメスは狭い。オスは、ネクタイ模様を誇示することによって求愛する。そのため、ネクタイ模様の幅の広い狭いが子孫を残すための重要な要素になっている。全国的に留鳥として生息する。樹洞に巣を作る鳥なので、郵便受けや伏せた植木鉢などにも巣を作ることがある。ジクジクジー、ツツピーなどと鳴く。木の枝につく虫や落ち葉をはねのけ、中にいる小動物などを食べる。餌台のヒマワリの種やピーナッツ、リードなども食べる。足で餌を押さえて食べることがあるので、餌台に来た時など観察してみよう。

スズメ

全長14.5cm 背は茶色と白の斑模様。腹部は白い。喉と頬に黒い模様があるのが特徴。全国的に留鳥として生息する。市街地に生息し、人の住んでいるところでないと見られない。家並から人が消えてしまうとスズメたちもいなくなってしまうほど、人に依存して生活している。これは、人と一緒に生活することにより天敵からの安全を確保しているためと思われる。春の子育ての時期に、屋根や梁の隙間からシリシリというヒナの声が聞こえてくるので調べてみよう。チュンチュン、チュツチュツなどと鳴く。行動に伴って声も変化するので、調べてみるとおもしろい。繁殖期には虫をよく食べるが、その他は穀類などの種子を主に食べる。

ムクドリ

全長24cm 背は黒色、腰と頬は白い。足と嘴はオレンジ色で目立つ。翼を広げて飛ぶ姿は三角定規に似ている。全国的に繁殖するが、北海道の一部の個体は冬季に南に移動する。樹洞を繁殖に利用する鳥であるが、巣箱や戸袋や屋根の隙間などでも繁殖する。卵は水色。木の実や地上に降りて虫などを採る。リャーリャーと鳴く。越冬期になると集団になり竹藪などでねぐらをとる。そのため、ねぐら入り前に電線や大きな木などに小群が徐々に集まり、大きな群れになっていく。鳴き声もにぎやかである。

オナガ

全長36.5cm キジバトよりやや大きいスマートである。頭の部分は黒い帽子をかぶったような感じで背と腹は灰色、翼と尾羽は青灰色で尾羽の先端は白い。留鳥として中部以北の本州に棲み、市街地や平地林などで見られる。雑食性で何でも食べる。グーイグーイと鳴く。カラスからの捕食を逃れるために、最近、繁殖場所にツミの営巣域を選ぶことが増えている。

ヒヨドリ

全長27.5cm 全体的に濃い灰色をしている。頬が赤褐色で、頭がぼさぼさしているのが特徴。全国的に分布するが、照葉樹林の林に多い。北海道や山間部では、冬期は暖地に移動する。以前は冬期に里や市街地で見られたが、最近では市街地に一年中いる個体も増えている。ピーヨピーヨと鳴き、波形に飛ぶ。渡りの時期には群れを作って日中に移動する。樹上性の鳥で植物の芽や葉、実などを食べる。動物質の餌も食べる。冬期は果実やツバキの花の蜜などを食べる。

カワラヒワ

全長13.5cm スズメよりやや小さい。オリーブ色の体に黄色の翼帯が目立つスズメぐらいの鳥。尾羽は凹尾になっていて目立つ。嘴は太くピンクがかっている。全国的に繁殖し、北海道の一部を除いて越冬する。市街地や農耕地で観察できる。キリリ、コロコロ、ピーンなどと鳴く。食物のほとんどは雑草の種子でまかなっている。ヒマワリの種を好み、種が熟す頃に食べに来る。ヒマワリを植えてカワラヒワを呼んでみよう。

秋になると群になり、オス同士が争い、勝ち残ったものから順にメスに求愛をし、つがいとなって群から出ていくという習性を持っている。つがいになれなかったオスはいつまでも囀り続けなければならない。

キジバト

全長33cm 胸から腹にかけてはベージュがかった灰色で、背は黒っぽく羽の先はオレンジ色を帯びる。首の横には、黒と青の縞模様がある。また、尾羽の先にうすい白帯がある。全国的に繁殖するが、北海道の個体は冬季に移動する。以前は市街地には冬季に見られたが、今では留鳥として生息している。いたる所で観察することができる。デッポポーと胸を膨らませて鳴く。餌は穀類を主に食べる。ヒナはビジョンミルクという親鳥の分泌液によって成長するため、餌の乏しい冬の時期でも繁殖が可能である。巣は、小枝を雑に組み合わせたものを立木の横枝に作ることが多い。冬に落葉樹の並木を見て歩くとキジバトの巣が見つかることがよくある。

繁殖期になると、ペアが電線などに止まって頭を上下に動かしながら求愛をする。また、ディスプレイフライトといって、巣の上空をふわりと輪を描きながら飛ぶことがある。それから、ハトの仲間は他の鳥と違い、水を飲む時に嘴を水につけたまま飲み続けることができる。このようにいろいろと特徴があるのでじっくりと観察してみよう。

ドバト

全長34cm。キジバトとほぼ同じ大きさであるが尾がやや長い。黒い2本ラインの二引きタイプや、黒ゴマ模様、白など羽の模様などいろいろある。

ドバトは、本来日本に生息していた種ではなく、インド付近のカワラバトが改良されたものである。通信手段の伝書バトとして使われていたものやペットとして飼われていたものが逃げ出したり捨てられたりして野生化した。そして、神社、公園などでの餌づけによって増加し、糞害をはじめとする問題も起こってきている。

求愛行動や繁殖行動などは比較的観察しやすいので、取り組んでみよう。

ハシブトガラス

全長57cm 全身黒色で青色の光沢を持つ。幼鳥には光沢味はなく、目の虹彩も青く、口の中は赤い。全国的に留鳥として生息する。山地と市街地での分布が多く、農耕地では少ない。ハシボソガラスとよく似ているが、ハシブトガラスのほうが一回り体が大きい。額が出っ張っているのも特徴の一つであるが、慣れないとなかなか見分けられない場合があ

る。この2種は鳴き方にそれぞれ特徴がある。ハシブトガラスは、体を前傾させ、尾羽を上下に振りながらカーカーと澄んだ声で鳴く。雑食性で何でも食べる。人間の出した生ゴミを食べて増加した。ほかの鳥や人の行動を見て繁殖中の巣を探し雛を襲うこともある。学習能力も高く、路上に貝やクルミなどの堅い物を置き、車に割らせて食べたりする。また、食べ物を一時隠して貯食することもある。ほかに、屋根やすべり台を滑り降りたり、電線にぶら下がったりして遊ぶこともある。冬場になると数千羽の集団ねぐらを形成するため、夕方になるとねぐらに向かう群れを見ることができる。身近な鳥で街路や公園でも見ることができ、その行動には興味を引くものが多々あるので、じっくり観察するとおもしろい。

ハシボソガラス

全長50cm ハシブトガラスより一回り小さい。全体が黒色で緑または紫光沢がある。額はあまり出っ張らず嘴も細い。留鳥として九州以北に生息する。ハシブトガラスとは分布はあまり重ならず、河原や農耕地などの開けた土地で多く見られる。鳴くときは、頭を上下に動かしながらガーガーと濁った声で鳴く。雑食性でネズミ類やカエル類、昆虫などの動物質のものや植物質の草や木の種子や実を食べる。採餌やねぐらなどに関する行動はハシブトガラスとあまり変わらない。

メジロ

全長11.5cm スズメより一回り小さく、全体に黄緑で腹部は淡黄色から白色。目の回りに白いアイリングがある。北海道の一部を除く全国で繁殖する。東北部以南で越冬する。最近、市街地でもよく見かけ、住宅地の庭木や街路樹にも巣があったりする。チーチーチュルチュル……などと鳴く。木の枝先や葉裏につくアブラムシなどの小動物やヒサカキなどの木の実を食べ、ツバキなどの花の蜜を吸ったりする。最近、都市鳥化しつつあるので、分布を調べ都市部への進出状況を調べてみよう。

ウグイス

全長♂15.5cm ♀13.5cm スズメとほぼ同じ大きさ、スズメより小さければメス、オスの体は少し大きい。オスメス共に色は全体的にオリーブグリーン。白い眉線がある。留鳥として全国の平地から山地まで幅広く分布する。北海道では夏鳥である。地域によっては冬になると平地に降りる個体もいる。主に林や林縁部の藪に生息する。ホーホケキョという囀りは有名であり、「法華経」と字を充て、聞きなしをする。しかし、メスの個体やオスの普段の声は地鳴きと呼ばれ、チャッチャツという舌打ちのような地味な声である。繁殖期には、オスはひたすら囀り、子育てはメスだけが行う。繁殖期は動物質の昆虫などを食べるが、冬期には果実類も食べる。また、餌台では牛脂なども食べる。

ジョウビタキ

全長15cm スズメとほぼ同じ位の大きさ。オスは灰色の頭部、黒い背、オレンジ色のお腹と腰が特徴。メスは全体的にオリーブグレーで腰がオレンジ色。日本には冬鳥として渡来する。渡来したての10～11月には、なわばり争いのためオスメス関係なく激しい争いをする。丘陵地から市街地にかけて渡来するが、人家の庭などでよく観察できる。なわばり性が強いので数は多く見られないが、1羽の個体があるなわばりにずっと居続けるので継続的に観察できる。ヒッヒッ、カッカツというような声で鳴く。尾を振りながら鳴くことが多い。食物は、ピラカンサヤタラなどの木の実や、木の枝や土中の小動物などである。なわばり性が強いので同種の侵入者に対してはすぐ攻撃をしかける。そのため、カーブミラーや車のバックミラーなどに写った自分の姿に対しても攻撃をしかける。木の実の採餌方法について、飛びついてとったり、枝に止まってもぎ取ったりといくつかのパターンが見られるので、観察してみよう。

シメ

全長18.5cm ムクドリより少し小さい。全体的に淡い褐色であるが部分的に濃淡がある。喉と目元が黒い。飛ぶと翼に白帯がでる。頭が大きく、嘴が太い。嘴は、繁殖期は鉛色で、冬になると肌色になる。オスメス似ているが、オスは色合いが濃く、メスは淡い。北海道では、繁殖するが冬期は暖地に移動する。本州以南では、冬期に平地で見ることが多

い。庭や公園でも見られる。太く強そうな嘴が示すように、主に種子を割ってその中味を食べる。地鳴きはプチィといった声を出す。

ツグミ

全長24cm ムクドリと同じ位の大きさ。全体的に茶褐色で腹には黒白の鱗模様がある。白い眉斑と胸を張って地上に立っている姿が特徴的である。全国的に冬鳥として渡来する。北海道では通過するだけである。クワックワツと鳴く。果実を食べたり、地上に降りて落ち葉をひっくり返ししながらミミズや虫などを捕らえて食べる。

オオルリ

全長16.5cm スズメよりやや大きい。オスは上面が緑色で腹は白く顔は黒い。メスはオリーブ色で地味。夏鳥として九州以北に渡来し、山間部の溪流付近の森林で繁殖する。春秋の渡りの時期には、市街地の公園などでも観察する機会がある。主に昆虫などの動物質を食べるが、渡りの時期などは木の実なども食べる。囀りは、沢を見おろすような見通しのよい枝先などで行う。ポーピーーピビなど数種のレパートリーを持つ。メスも囀りに似た声を出す。

キビタキ

全長13.5cm スズメよりやや小さい。オスは上面が黒く、喉から胸にかけて橙黄色、眉斑と腰も黄色い。メスは全体がオリーブ褐色で地味である。夏鳥として全国に渡来し、平地から山地にかけての樹林帯で繁殖する。樹洞を巣として使用するが、巣箱や建物の利用も観察されている。林内で昆虫を捕らえて食べる。渡りの時期には、市街地の公園などにも立ち寄り、ミズキなどの果実もよく食べる。囀りは、オーシーツクツクなど数種類のレパートリーがある。

ヤマガラ

全長14cm スズメよりやや小さい。頭と喉が黒く、腹は橙褐色、背と翼は灰色である。留鳥として全国に分布する。照葉樹林に多い。地鳴きは、ニイニイ、ピーピーなど鳴く。昆虫やシイやエゴなどの実を食べる。貯食する性質があり、地面や樹皮の隙間などに木の実などを隠す。

コゲラ

全長15cm スズメよりやや大きいキツツキの仲間。背は黒褐色と白の横斑模様、腹は同じ色合いの縦斑である。オスは後頭部に赤い羽を持つが、普段は隠れている。留鳥として全国の森林に生息する。最近は市街地の公園などでも繁殖するようになってきている。木をつつきながら虫を探しては捕らえて食べる。マユミなどの木の実も食べる。キツツキの仲間は、幹に垂直に止まることが多いので、前後二本ずつになった足指と堅い尾羽で体を支える。地鳴きでギーという声を出す。

エナガ

全長13.5cm スズメより小さい。尾が長く全体の半分を占めるため体は小さい。顔から腹にかけては白、背に黒とピンクと白の模様があり、黒い過眼線が目立つ。留鳥として九州以北の平地から山地の森林に生息する。冬期はカラ類と共に混群を作って移動する。林の中で樹皮や葉などから虫を探して食べる。エナガには子育てをしているつがいを助けるヘルパーという役割を果たすものがある。繁殖に失敗した個体やつがいが形成できなかった個体がそれにあたる。中には、シジュウカラの子育てを助けたエナガもいる。ジュリジュリと濁った声で鳴くが、ツイーというような金属的な声も出す。北海道には過眼線のない亜種のシマエナガが分布する。

オオヨシキリ

全長18.5cm スズメよりやや大きい。上面は単褐色で下面は黄白色。褐色の眉斑があり、口元にヒゲがある。夏鳥として全国的に渡来する。一夫多妻の鳥でオスが先に渡来し、縄張りが定まった頃メスが到着してつがいの形成が始まる。アシに止まりギョギョシギョギョシと大きな赤い口を開けて囀る。アシにつくクモや昆虫類を食べる。カッコウに托卵されるものも多い。

セッカ

全長12.5cm スズメより小さい。上面は褐色で、下面は淡褐色。尾羽の先端は白く、裏側から見ると白帯のように見える。本州以南の水辺の草原や畑、ススキ原などで繁殖し、冬期は暖地に移動する個体もある。ヒッヒッヒッ……チャッチャツ……と囀りながら飛翔する。草の中でクモや昆虫類を捕らえて食べる。

ヒバリ

全長17cm スズメよりやや大きい。全体が茶褐色で、頭に短い冠羽がある。後指の爪が長いのが特徴である。尾羽の外側は白い。沖縄を除く全国の農耕地や河原や草原などで繁殖する。北国の個体は、冬期には暖地に異動する。冬期は、河原などで小さな群れを観察することがある。ウォーキングで歩きながら地上で虫や植物の種などを食べる。春先になると田園地帯の上空でピーチュルピーチュルジリジリなどと囀りながら飛翔する。繁殖期になると見晴らしのよい杭や石の上などで冠羽をたてて囀る。

モズ

全長20cm スズメより一回り大きい。オスは背が灰色で翼に白斑がある。肉食のため嘴は鋭い。全国の平地、低山地の林縁などで繁殖する。北国や山地の個体は冬になると暖地に移動する。秋になると冬場の縄張りを確保するため、目立つ場所でキーキキキなどという声で鳴く。これを高鳴きと言う。このような冬場からの縄張り確保もあって、繁殖は春早くから行われる。はやにえと言って、小鳥や小型哺乳類や小動物などを捕らえて木の枝や有刺鉄線などに刺しておくことがある。モズは自分をより大きいシロハラなどを捕らえて食べることもある。また、モズは他の鳥の鳴き真似をすることでも知られている。

ホオジロ

全長16.5cm スズメより少し大きい。顔に白と黒の縞模様があり、背は赤茶と黒の縞模様、胸は赤茶色で尾羽の外側が白い。メスは全体的に淡い。九州以北に普通に見られ、国土の64%で繁殖している。北方では、冬に南に移動する数も多い。林のへりなどに生息する。繁殖期には昆虫を食べるが、秋冬は植物の種子などを主に食べる。チョッピーチピツツーチリリなどと囀るが、レパートリーは多い。囀りは、「一筆啓上仕り候」などと聞きなされている。独身のオスはペアを探すために目立つ場所で上を向きながら囀る。秋にも囀るが、それは翌春のなわばりとつがいの相手を確保するための行動である。

カシラダカ

全長15cm スズメと同じ位の大きさで、背は茶褐色に黒の模様がある。胸に縦斑があり、腹にかけての下面は白い。この腹の白はよく目立つ。頭に短い冠羽がある。日本には冬鳥として九州以北に訪れる。北海道では通過鳥。農耕地や河原などで地上を歩きながら草の種子などを食べて過ごす。地鳴きはチッチットと一声ずつ鳴くのでホオジロと区別できる。

アオジ

全長16cm スズメと同じくらいの大きさ。背は茶褐色の縞模様。胸は黄色が目立つ。尾羽の外側が白い。本州の中部以北の山地の明るい林やそのへりに生息し、繁殖する。北日本では平地にも生息する。冬になると暖地を求めて南下したり低地に降りたりして、市街地の庭や公園などでも見ることができるが、やぶかげで草の実を食べたりしているので鳴き声が聞かれるわりには見る機会が少ない。囀りは、ゆっくりとした調子でチュッチン チュルリ、ティーリュリーなどと鳴く。地鳴きは、チッ、ジッなどと強めに鳴く。

ミヤマホオジロ

全長15.5cm スズメと同じくらいの大きさ。喉と眉斑の黄色が目立つ。背は茶褐色の縞模様、頭に短い冠羽がある。メスは黄色が淡い。主に冬鳥として渡来する。中国山地では繁殖もしている。西日本では普通に見られる鳥であるが、関東では観察機会が少ない。丘陵地の明るい林などで地上を歩きながら草の実をついばんでいることが多い。地鳴きは、チッチットと鳴く。

カケス

全長33cm キジバトと同じくらいの大きさ。背は暗褐色、尾が黒い。翼の一部に青と白の縞模様がある。飛ぶと腰の白がよく目立つ。九州以北の低い山地に留鳥として生息するが、冬期に低地に降りる個体もある。北海道にはミヤマカケスという亜種が分布している。秋冬には木の実をよく食べる。特にドングリを好む。また、貯食する習性があるため、口にドングリなどをくわえ、頬張って運んでいる姿を見ることもある。落ち葉の下などに運んだドングリを隠す。ジェージェーと濁った声で鳴く。モズと同じように他の鳥の鳴き真似をする。アリの群れの中

に座り込んで「蟻浴」をすることがある。

コジュケイ

全長27cm キジバトよりやや小さい。全体的に茶褐色で顔から胸にかけてオレンジ色と灰色の模様のあるための鳥。本州以南の温暖な地方の平地から山地にかけての雑木林などに留鳥として生息する。中国南部原産で1915年東京で飼育されていたものが逃げだしたのが日本での分布の始まりらしく、その後狩猟鳥として放たれて現在に至っている。地上を歩きながら草の実などをついばむ。ピーッピィピィ、ピーッピィピィなどと大きな声で鳴く。「ちょっとこい」と聞きなされて親しまれている。鳴き声はよく聞かれるが、警戒心が強く姿を見ることは稀である。

キジ

全長♂80cm ♀60cm オスは赤い顔、紫色の胸、緑の腹が目立ち、尾が長い。メスは淡褐色、尾も短めで地味である。本州以南に留鳥として生息する。北海道や長崎県対馬では、コウライキジが放鳥されている。草原や農耕地、牧場などの開けた場所で歩きながら草の実などをついばむ。繁殖期以外は、雌雄別々の小群を作って生活する。夜間は樹上で眠る。オスは繁殖期になるとケンケンと目立つ声で鳴き、その後羽をふるわせてドドドという音を出す。これをホロを打つと言う。「国鳥」に指定されているが、狩猟の対象にもなっている。そのため、人工繁殖させた個体を放鳥している。この放鳥により亜種レベルでの交雑が進み、純粋種が絶滅する恐れが指摘されている。